

collab  
collective

# インテリジェントな会議スペースへ の変革をリード

AI カメラが会議スペースをインテリジェントで管理しやすい  
体験へと変革する



# 会議は進化しています。 貴社の高価値スペースは時代の変化に追いついていますか？



役員会議室でビデオ障害が起きると、IT チームが呼ばれます。全社集会でカメラがプレゼンターの動きについていけないと、施設管理チームは苦情に追われます。リモート参加者が発話者を特定できない場合、すべてのデバイスが設計どおりに動作していても、その会議室には「機能不全」というレッテルが貼られます。

Microsoft の Work Trend Index によると、パンデミック以降、週あたりの会議は153% 増加しており、減少の兆しは見えません。<sup>1</sup>IT チームや施設管理チームにとって、この急増は、使用中の会議室が増え、負担のかかるテクノロジーが増え、問題が発生する機会が増えることを意味します。

標準的な会議室での問題は、ほぼ解決されています。インテリジェントフレーミングを搭載した一体型ビデオバーは、日常的なコラボレーションを支える信頼性の高い基盤を IT チームにもたらしめました。

しかし、役員会議室、トレーニングセンター、全社会議室といった高価値のスペースは、根強い問題を抱えています。こうした部屋はより規模が大きく、カメラと音響装置が分かれたモジュール式の AV システムに依存しており、ミスが許されない環境です。

IT チームや施設管理チームにとって、このような会議室は未だに苦情や土壇場でのエスカレーションを生み出し、テクノロジーが会議に追いついていないという漠然とした懸念をひき起こす厄介な環境です。

この eBook では、AI 対応カメラが現代の会議室において欠かせない存在となっている理由を、アナリスト主導の視点で考察します。さまざまな会議室ポートフォリオを管理する IT チームにとって、カメラレイヤーに組み込まれたインテリジェンスが、体験の一貫性、運用効率、そしてスペース活用のインサイトにどのような変革をもたらしているのかを詳しく解説します。

現在の会議は、数年前と比べても動的で分散型になり、視覚的にも高度な要件が求められるようになりました。McKinsey によると、現在90%の組織がハイブリッドワークを導入しており、コラボレーションが行われる方法と場所は根本的に変化しています<sup>2</sup>。会議スペースへの影響は以下のように極めて大きなものです。



参加者は会議中にずっと同じ立場に留まるわけではなく、同一セッション内でプレゼンテーションを行い、コラボレーションし、質問し、という風に役割を切り替えていきます。



リモート参加者は、全員が自宅からオンライン参加しているときのように、会議室内の参加者をはっきりと見ながらやり取りできることを望んでいます。



会議スタイルとしては、ディスカッションとプレゼンテーションが融合するスタイルが増えています。そのため、多くの場合、複数のやり取りパターンにリアルタイムで応じられるスペースが必要となります。



全社会議室、役員会議室、トレーニングセンター、多目的室といった高価値スペースは、影響度が極めて高く、ミス許容度が極めて低い環境です。

しかし、こういった会議スペースの多くは、未だに時代遅れの前提に基づいて設計されています。

- II 誰かが立ったり動いたりした瞬間に参加者を見失うカメラ
- II 「会議室の専門家」がいないと操作できない、あるいはリモコンを探し回るせいで会議の開始が遅れてしまうようなコントロール機器
- II ブレインストーミングを役員プレゼンテーションと同じように扱う手法

結果は予想できます。ユーザーは、テクノロジーに支えられるのではなく、テクノロジーをかわしながら対応しているのが実情です。彼らは期待値を下げ、特定

の会議室を避けるか、単に「ビデオはそこではうまく機能しない」と諦めます。

IT チームや施設管理チームにとって、このギャップは、苦情チケットの増加、コントロール機器やテクノロジー準備を万全にするための過度に手厚い人的サポート、重要な会議前の土壇場でのエスカレーション、機器が設定どおりに機能していても会議室が十分に機能していないという慢性的な懸念として現れます。

会議室の環境がニーズに追いついていないとき、ユーザーはテクノロジーのせいになります。そのしわ寄せがくるのは IT チームと施設管理チームです。

## 兆候のチェックリスト：以下のような経験はありませんか？

- プレゼンターは動いた途端「消えて」しまう。
- ユーザーが特定の会議室を避ける
- 広い会議室で映る顔が小さくなり過ぎる（「ボウリングレーン（縦長会議室で奥が見えない）」問題）
- リモコンを探している間に会議開始が遅れる
- IT チームが問題を認識するのは苦情があった場合のみである

3つ以上チェックがある場合、会議室の進化にカメラが追いついていない可能性があります。

## 受動的なカメラ使用からインテリジェントな会議室認識への転換

先に挙げた課題は、解決できないものではありません。これらは特定世代のカメラテクノロジーを反映しており、予測可能な環境を前提に構築されたものです。会議のあり方が進化するにつれて、それを支えるテクノロジーも進化しています。

インテリジェントフレーミングは新しいものではありません。グループフレーミングやアクティブスピーカー検出のような機能は、標準的な会議室で長年にわたり成果を上げてきました。こういった機能は、参加者が着席し、見通しが良く、会議形式が一貫しているときにはうまく機能します。多くの会議室にとって、これらの機能は引き続き最適な解決策です。

ロジクールの Rally Bar ファミリーと Sight（テーブル中央の AI 駆動カメラ）は、標準的な縦長会議室や従来の長方形の会議室でこの種のインテリジェンスをすでに提供しています。レイアウトが予測可能でテーブルを中心にやり取りされる大規模な会議室の多くでは、Rally Bar と Sight を組み合わせることで、手動操作を必要としないインテリジェントで直感的なマルチカメラ対応が可能になります。

しかし、高価値スペースではそれ以上のものが求められます。トレーニングルーム、全社集会、エグゼクティブブリーフィングセンター、多目的スペースには、第一世代のインテリジェントカメラでは想定されていなかった変動要素が存在します。例えば、動き回るプレゼンター、カメラから遠い位置にいる参加者、一つのセッション内で対話型のディスカッションからフォーマルなプレゼンテーションへと移行する会議形式などが挙げられます。

こういったスペースが必要とするのは、単に光学性能を高めたり、処理速度を向上させたりすることではありません。**コンテクスチュアル・ルーム・インテリジェンス**（スペースがどのように使用されているかを認識し、それに合わせてフレーミングの動作を適応させる能力）が必要になるのです。

### コンテクスチュアル・ルーム・インテリジェンス

「次世代の会議室カメラは、解像度やズーム範囲だけで決まるものではありません。それを決定づけるのは認識力です。つまり、スペースの使い方を把握し、適切なフレーミング動作で応答する能力です。私はこれを『コンテクスチュアル・ルーム・インテリジェンス』と呼んでいます。これは IT チームや施設管理チームが高価値のコラボレーションスペースに取り組み方における、意義ある転換を意味します。

— Craig Durr (チーフアナリスト、The Collab Collective)



JLL の2024年 Global Occupancy Planning Benchmarking Report（グローバル使用率計画ベンチマークレポート）によると、87%の組織が従業員に対して、少なくとも週のうち何回かは出勤するよう要請しているものの、各従業員が出社すべき曜日を明確に定めているのはわずか15%に過ぎません。<sup>3</sup> その結果、運用の予測不可能性が生じています。月曜日に6人でブレインストーミングを行う部屋で、水曜日に20人でプレゼンテーションを行うこともあります。いつも変わらない、予測可能な使用を前提とするテクノロジーは、この変化のスピードについていけません。

この転換は手動から自動の移行ではありません。反動的なものから意図的なものへの変化です。調整されるのを待つカメラから、会議の状況に応じて予測可能な動作をするカメラへと移行しつつあるのです。カメラはもはや単なる撮影デバイスではなく、より広範なスペース戦略を支えるインテリジェントな構成要素となっています。スペースとユースケースに合わせて構成されたインテリジェントカメラは、操作の煩雑さを減らし、人的介入を最小限に抑え、セッション全体で一貫した結果をもたらします。

IT チームや施設管理チームにとって、この転換は業務運営の構図を大きく変えるものです。

# ロジクールが現在の会議スペースに合わせてインテリジェントカメラを進化

会議スペースが進化する中、カメラの革新は解像度、ズーム、画角の段階的な性能向上だけで終わらせてはなりません。光学性能は引き続き重要ですが、それだけでは現在の会議室の会議室の利用実態に十分対応できません。

ロジクールの最新カメラはこの転換を反映したものです。従来の仕様を超えて、インテリジェンス、管理性、ポートフォリオ設計が全社規模でどのように連携するかに重点を置いています。ロジクールはこの方向性で長年取り組んできました。Rally Bar と Sight の組み合わせは、インテリジェントな「インサイドアウト」の視点を提供します。これは、標準的な会議室や従来型の大規模会議室向けに、テーブル中央のカメラとインテリジェントな切り替え機能を活用したものです。

ロジクールは Rally AI Camera と Rally AI Camera Pro を追加して「アウトサイドイン」のマルチカメラアプローチを提供するようになりました。これはモジュール式のプロオーディオ、柔軟なレイアウト、プレゼンターの追尾が不可欠な高価値のスペース用です。このポートフォリオは、統一された管理とインテリジェンスのフレームワークの下でどちらの構成にも対応できるようになりました。

- || ロジクールの Rally AI Camera と Rally AI Camera Pro は、モジュール式会議室システムのプロフェッショナル会議用カメラを基盤とし、内蔵のインテリジェントフレーミング、高度な映像処理、さまざまな会議室レイアウトに対応する柔軟なマウントオプションを搭載しています。
- || これらの機能は引き続き重要です。特に、視線、距離、およびプレゼンテーションの動きが複雑な大規模スペースや複雑なスペースでは、ソフトウェア主導のみのフレーミングではなく、光学的な制御が求められるからです。
- || しかし、こういったカメラの主な進歩は光学性能だけではありません。インテリジェンスが組み込まれる仕組みこそが、進化するスペースの稼働状況と運用上のニーズを支える進歩です。



Rally AI Camera Pro



Rally AI Camera



アナリストの観点から、ロジクルのアプローチはカメラのイノベーションを3つの独自の価値領域に集約させています。

### カメラの AI が会議体験で果たす役割。

ロジクルの AI 対応カメラは、会議の形式に合わせてユーザーが目的別に選択できる複数のフレーミングモードを備えており、多様な会議スタイルに柔軟に対応します。モードを選択すれば、カメラは一貫した予測通りの動作をするため、ディスカッション、スピーカー主導の対話、プレゼンター主導の進行など、さまざまな会議スタイルを手動操作なしで効果的に支援します。

### IT チームや施設管理チームに対して AI 対応カメラが提供するもの。

これらのカメラは、集中管理ツールを使用して表示、監視、管理できるように設計されており、増え続ける会議室ポートフォリオ全体で一貫性、可視性、ライフサイクル管理をサポートします。また、重要な IT 課題に対応する状況に応じた会議室インテリジェンス情報も収集します。具体的には、設備に対するエンドユーザーの不満を最小限に抑え、使用状況検知や、予約時間中に未使用の場合の部屋の自動解放といった自動ワークフローを通じて利用率を向上させます。

### ポートフォリオアプローチが1つの組織内の多様な会議室タイプをサポートする方法。

ロジクルは、すべての会議室に同じカメラや同レベルのインテリジェンスを導入すべきだとは考えていません。ポートフォリオにより、組織は一貫した体験と運用モデルを維持しながら、カメラの機能を部屋のサイズ、レイアウト、使用状況に合わせて調整できます。

ロジクルは、インテリジェンスを独立した機能ではなく、**体験、運用、スケーラビリティ**を結びつける設計原則と位置付けています。



価値領域  
**体験**

フォーカス  
テクノロジーが機能した  
ときの部屋での状況



価値領域  
**運用**

フォーカス  
導入機器全体の日々の運用実態



価値領域  
**スケーラビリティ**

フォーカス  
ポートフォリオレベルで  
の戦略的変化

以下のセクションでは、各価値領域を掘り下げ、インテリジェントカメラが会議の成果を向上させ、管理を簡素化し、組織がさまざまな会議スペースを自信を持ってサポートできるようにする方法を具体的に説明します。



## 体験

### カメラの AI が実際に提供するもの

AI 対応カメラは、多くの場合、抽象的な言葉で説明されます。実際には、カメラレイヤーのインテリジェンスにより、**具体的で再現性のある結果**が得られます。会議室内での会議の方法が改善され、その成果を複数スペースで一貫して実現できるようになります。

ロジクールは、インテリジェントなフレーミングとトラッキング機能である **RightSight 2** によって会議体験の価値を高めます。

**適応型フレーミングは、会議の意図に沿った映像体験を実現します。** 会議の形式によって、カメラに対する要求は異なります。ロジクールの AI 対応フレーミングモードは、会議の目的（ディスカッション、プレゼンテーション、またはコラボレーション）に視覚体験を合わせます。これらの動作は、**RightSight 2** によって実現され、インタラクションのスタイルに最適化された複数のフレーミング方式に対応しています。

|| **スピーカービュー**は、スピーカー主導のセッションで発言しているスピーカーを目立たせ、リモート参加者が会話をより自然に追えるようにします。

|| **グリッドビュー**は、複数の参加者がやり取りする場面でも全員を公平に可視化します。

|| **グループビュー**は、コラボレーション中のディスカッションですべての参加者を可視化した状態に保ちます。

|| **\*新機能\*のプレゼンタービュー**（Rally AI Camera Pro 対応）は、プレゼンターがスペース内を移動しても追尾できる機能です。ゾーンを事前に定義しておかなくても、よりダイナミックなプレゼンター主導のインタラクションを可能にします。

グリッドビュー (**RightSight 2**) は、会議室内の各参加者を同サイズのタイルに配置し、リモート参加者向けに、スペース内の全員をバランスよくクリアに映し出します。



**会議で手動でのカメラコントロールが少なく済むと、ユーザーの作業負担と認知負荷が軽減されます。** RightSight 2は、ユーザーが会議スタイルに最適なフレーミング動作を選択できるので、セッション中のリモコン、プリセット、定期的なカメラ調整への依存が減ります。IT チームにとってのメリットは、モードベースのフレーミングがもたらす動作の予測可能性です。デフォルト設定またはモードを選択されると、カメラは常に安定した動作を維持します。ユーザーは動作を予測できるようになり、サポートへの問い合わせが減少します。

**光学的到達距離と簡素化されたコントロールが体験価値を高めます。** 広いスペースでは、Rally AI Camera Pro が15倍のハイブリッドズームを実現し、遠くからでも顔を鮮明で識別可能な状態に保ちます。プレゼンターやその他の被写体を映す場合、プレゼンタービューを使用して最大4人の

プレゼンターを直感的に追尾できます。またカメラを Rally プリセットボタンとペアリングすることで、事前定義されたビューの間をワンタッチで切り替えられるため、リモコンでの探索やメニューナビゲーションが不要になります。これは、ホワイトボードや共有デモエリアのような、フォーカス対象が予測可能な場面で効果的に機能します。施設管理チームにとってのメリットは、高価値の会議室が特別な回避策がなくても機能することです。IT チームにとっては、会議前の遅延が減り、オンボーディングの負担が軽減されることがメリットになります。

ユーザーが違いを実感するのが、体験レイヤーです。一方で、IT と施設管理のチームにとって、会議室内の改善はすべて、会議室の外部での運用負荷の改善につながります。

機能	ユーザー体験	IT / 施設管理チームの成果
<b>RightSight 2 フレーミングモード</b>	手動調整を必要としない会議に適したフレーミング	予測可能な動作、サポート問い合わせの減少
<b>15倍のハイブリッドズーム (Pro)</b>	広い部屋で距離があっても確保できる鮮明なビジュアル	高価値のスペースが回避策なしで機能
<b>プレゼンタービュー (Pro)</b>	移動するプレゼンターを自動追尾	手動 PTZ 操作に関する苦情を削減
<b>プリセットボタン</b>	あらかじめ設定されたエリアへのワンタッチでのビュー切り替え	オンボーディングの負担軽減と会議前の遅延の減少





## オペレーション

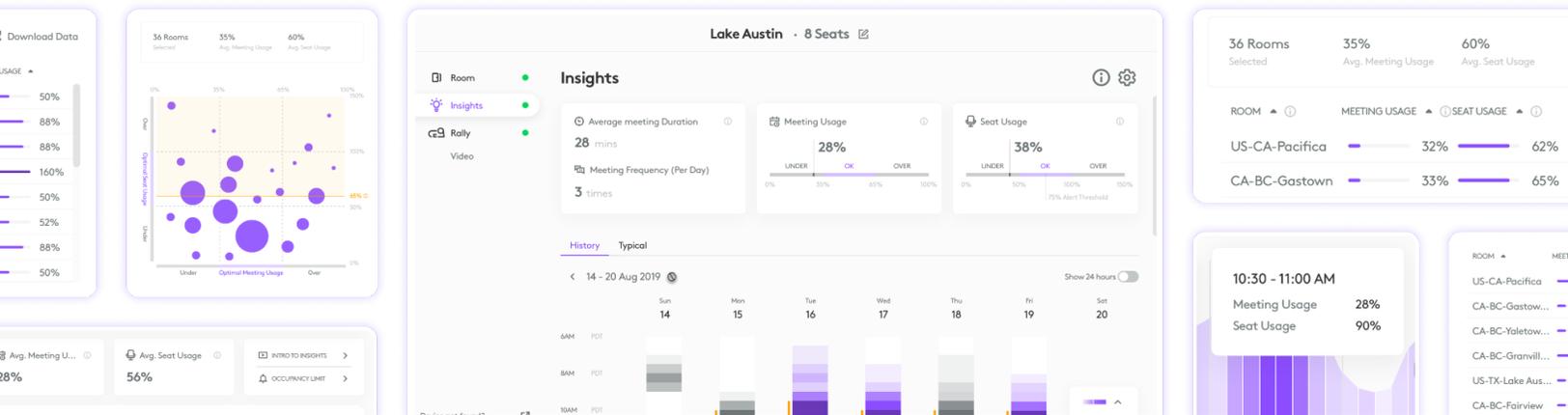
### IT チームや施設管理チームが重視するレイヤー

IT チームや施設管理チームにとって、会議室のテクノロジーは1部屋ずつ評価されるものではありません。数十または数百のスペース全体で評価されるもので、それぞれに導入、監視、保守、サポートが求められます。運用の価値は、可視性、一貫性、負担の軽減で測定されます。

**ロジクール Sync を通じた集中管理の可視性。** Rally AI Camera や Rally AI Camera Pro はロジクール Sync と統合され、ポートフォリオ全体のデバイスの健全性、ファームウェアの状態、会議室のアクティビティを一元的に表示します。カメラは USB-C または

Cat ケーブル（オプションの拡張キットを使用）を介してコンピュータに接続されますが、WiFi 経由のネットワーク接続により、追加のコンピュータを接続することなく Sync を経由して集中管理、洞察、管理が可能になります。

分散環境を管理する IT チームにとって、これにより後手に回るサポート対応を生む見落としをなくします。問題が表面化するのには苦情チケットではなく、ダッシュボードになるからです。



**より効率的なスペース計画を促進する利用状況についてのインテリジェンス。**これらのカメラはリアルタイムの利用状況データを収集し、そのデータを直接 Sync に送信します。スペースの使用状況に関するインサイトを得ることで、特に大規模で価値の高いスペースにおいて、不動産に関してより適切な意思決定が可能になります。これにより、予約したスペースが空いたときに自動的に部屋を解放し、空き状況を妨げるゴースト会議を減らし、人的介入なしにスペース全体の利用率を向上させます。

ハイブリッドワークを推進する組織にとって、会議室は、静的な資産から実際の状況に基づいて自己修正する応答性の高いシステムに変わります。

**簡素化された導入とライフサイクル管理。**柔軟な接続オプションにより、部屋のインフラに合わせて導入を調整することができます。ファームウェアの更新は Sync を通じて一括で配信されるため、導入台数が増えても一貫した環境を手間なく維持できます。

IT 部門にとって、これはカメラがスムーズに設置でき、常に最新の状態を保ち、継続的な介入が最小限で済むことを意味します。

スケーリングが管理可能になるのが運用レイヤーです。カメラのインテリジェンスは、IT と施設管理のチームが手間なく導入、モニター、維持できてこそ意味があるのです。



## スケーラビリティ

### ひとつの組織。さまざまな会議室タイプ。

同じ会議室タイプは2つとありません。ハドルスペース、役員会議室、トレーニングセンター、そして多目的の全社会議室のカメラテクノロジーの要件は、それぞれ異なります。組織全体でビデオコラボレーションを拡大するには、1つのソリューションをあらゆるシナリオに当てはめるのではなく、ポートフォリオアプローチが必要となります。

**Rally AI Camera と Rally AI Camera Pro は、広いスペースにおけるインテリジェントなマルチカメラ体験を実現する新しいアプローチを提供します。**従来の大会議室用の Sight が含まれている、ロジクルールの Rally Bar ファミリーは、すでに標準会議室用の AI 対応フレーミングを提供しています。こういったソリューションは、多くの環境にとっては引き続き適切な選択肢です。現在、Rally AI Camera と Rally AI Camera Pro は、この基盤を高価値で独自の構成を持つ複雑なスペースにまで拡張しています。経営幹部がテーブルに物を置きたくない役員会議室、不規則なレイアウトの多目的室、プレゼンター重視の環境といった、会議室のダイナミクス、プレゼンターの動き、光学的な到達距離が専用設計の機能を必要とするスペースです。

**高価値の会議室が求める柔軟性。** Rally AI Camera は、可動部品のない高解像度の EPTZ フレーミングを

実現し、主カメラ、補助カメラ、さらには第三カメラとしても、目立たずに設置できます。オプションの埋め込みウォールマウントにより、部屋の美観を損なうことなくインテリジェントなビデオ体験を実現します。Rally AI Camera Pro は、プレゼンターの移動、長い距離、そして高い重要性が求められるスペースのために、メカニカル PTZ、15倍ハイブリッドズーム、プレゼンタービューを追加しました。既存のプロフェッショナルオーディオインフラを備えた会議室では、両カメラとも Shure、Biamp、Q-SYS、Nureva のサードパーティ製システム、既存の Rally スピーカー、マイクポッドと連携するため、置き換えるのではなく統合できます。

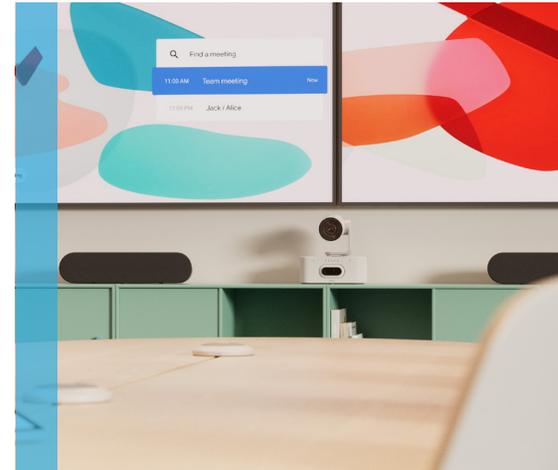
**本質的な部分での一貫性：管理と体験。** どのカメラが導入されても、すべてのデバイスはロジクルール Sync 経由で認識されます。IT チームは、複数のエコシステムではなく、機器一式を管理します。ユーザーは、中規模会議室であろうと、エグゼクティブ・ブリーフィング・センターであろうと、一貫性のある予測可能なフレーミング動作を体験できます。

スケーラビリティとは、どこにでも同一の機器を導入することではありません。ポートフォリオ全体で運用の一貫性を維持しつつ、各会議室のニーズに適した機能を組み合わせることでいくことです。



## 会議室に合うインテリジェントカメラ

会議室タイプ	主なソリューション	主な機能
ハドル / フォーカスルーム	Rally Bar Mini	一体型のシンプルな設計
中規模から大規模の会議	Rally Bar +Sight または Rally AI Camera	部屋の中央に設置する「インサイドアウト」方式、または目立たないモジュラー式システムによる「アウトサイドイン」視点に対応したインテリジェントフレーミング
大役員会議室	Rally Bar +Sight または Rally AI Camera Pro	「インサイドアウト」ビューで到達範囲を拡張するか、または「アウトサイドイン」ビュー用の独立型 EPTZ を選択
高価値 / 多目的	Rally AI Camera Pro	プレゼンターの追尾、15倍ハイブリッドズーム、プレゼンターボタン



## 結論

# インテリジェントカメラからインテリジェント会議室戦略へ

IT チームや施設管理チームが直面している課題は消えていません。会議の件数は多いままで、会議室の使用パターンは相変わらず予想できません。価値の高いスペースへの要求は高まる一方で、標準的な会議室テクノロジーでは対応しきれない状況が続いています。そして「どの会議室でも問題なく使える」ことへの期待は高まる一方です。

変わったのは、こういった期待に応える利用可能な対策のほうです。

インテリジェントカメラはもはや実験段階にあるものではありません。会議室の非効率を解消し、スペースプランニングに活用可能なデータを可視化し、多様な環境で一貫して導入可能な運用ツールです。受動的な撮影デバイスから、私が「コンテクスチュアル・ルーム・インテリジェンス」と呼ぶものへの転換は、組織による会議スペース戦略へのアプローチを根本的に進化させています。

現状を評価した結果、ロジクールの Rally AI Camera と Rally AI Camera Pro がこの進化を反映していると考えられます。これらのカメラは、第一

世代の AI カメラでは苦戦するスペースにインテリジェントなフレーミングを拡張し、Sync を通じて集中管理に統合されます。そしてそれらは、運用上の一貫性を損なうことなく、各会議室のニーズに応じて機能を適切に割り当てるポートフォリオアプローチに組み込まれています。

IT や施設管理のリーダーにとって、カメラにインテリジェンスが必要かという議論はすでに過去のものです。焦点は、それをどこから導入するかにあります。

**IT および 施設管理チームへの私の推奨事項：**繰り返し問題が発生、または苦情が多く寄せられる高価値のスペースの監査から始めてください。代表的な会議室2〜3室を選び、Rally AI Camera または Rally AI Camera Pro を試験運用してください。Sync データを使用して、体験と運用が改善したかを検証します。その後、会議室のタイプとニーズに基づいてポートフォリオ全体に拡大します。

最も重要な会議室には、実際に使用される方法に合わせて設計されたテクノロジーが必要です。



### はじめの一步

#### 次の条件に当てはまる会議室を優先的に検討してください。

- 役員会議、取締役会、または注目度の高いセッションを開催する
- ビデオ品質やフレーミングに関して頻繁に苦情が寄せられている
- 頻繁な手動カメラ調整や「会議室のエキスパート」の介入を必要とする
- プレゼンター主導の形式（トレーニング、経営説明全社会議、全体会議）に対応する
- 頻繁に利用されているものの期待される成果が出ていない

2つ以上チェックがある場合、その会議室はコンテクスチュアル・ルーム・インテリジェンスの強力な候補です。



<sup>1</sup> Microsoft 「Work Trend Index 年次レポート 2024」 (Microsoft WorkLab, 2024年)  
<https://www.microsoft.com/en-us/worklab/work-trend-index/ai-at-work-is-here-now-comes-the-hard-part>

<sup>2</sup> McKinsey & Company 「The State of Organizations 2023」 (McKinsey & Company, 2023年)  
<https://www.mckinsey.com/capabilities/people-and-organizational-performance/our-insights/the-state-of-organizations-2023>

<sup>3</sup> JLL 「2024 Global Occupancy Planning Benchmarking Report」 (JLL, 2024年)  
<https://www.jll.com/en-us/newsroom/jll-report-uncovers-path-forward-for-global-occupancy-planning>



## 会社情報



**Craig Durr 氏**は、職場のコラボレーションとコミュニケーションに重点を置いた業界アナリスト企業、The Collab Collective の主任アナリスト兼創立者です。Craig 氏は、アナリスト、研究者、基調講演者として活動する中で、企業、従業員、顧客の間でシームレスなつながりを可能にするサービス、テクノロジー、およびデバイスに関するインサイトを深めてきました。

テクノロジー以外にも、仕事における複雑な人間的側面についても調査し、得られた知見を、労働力、職場、現代の業務体験のワークフローに分類しています。これらの要素を明らかにすることで、未来の職場に不可欠なテクノロジー、生産性、およびビジネス戦略の間の複雑な相互作用の解明に貢献しています。

 [cdurr@collab-collective.com](mailto:cdurr@collab-collective.com)

 [craigdurr](https://www.linkedin.com/in/craigdurr)

 [@craigdurr](https://twitter.com/craigdurr)



職場のコミュニケーションとコラボレーションの進化する環境について、データに基づいた分析と、現在のハイブリッド環境を形作る労働力、職場、ワークフローに関する高度な知識を組み合わせ、深いインサイトを提供します。当社のアナリストは、職場のコラボレーション、顧客体験、従業員体験のテクノロジー、そして創造性とワークフロー管理のための企業アプリケーションの専門家であり、これらのソリューションが実際の業績にどのように貢献するかについて包括的な理解を提供しています。

 [www.collab-collective.com](http://www.collab-collective.com)



ロジクールは、ビジネスの成功に貢献し、仕事や制作、ゲーミング、ストリーミングにおいて、人と人をつなげるソフトウェア対応のハードウェアソリューションを開発しています。当社の使命は、人々とデジタルの世界を結ぶ接点として、人々と地球に優しい方法で、仕事と遊びにおける人間の可能性を拡大することです。1981年に設立された Logitech International は、スイス連邦の株式公開企業であり、スイス証券取引所（SIX：LOGN）と NASDAQ Global Select Market（LOGI）に上場しています。ロジクールとビジネス製品、エンタープライズソリューションについて詳しくは、[www.logicool.co.jp/business](http://www.logicool.co.jp/business)、当社の[ブログ](#)、[Logitech Business](#)、または[@LogitechBiz](#)をご覧ください。

 [www.logicool.co.jp](http://www.logicool.co.jp)